

「よはひ草」を読んで、その内容の検討*

鈴木 勝** 新国 俊彦***
谷津 三雄**** 鈴木 邦夫*****

「よはひ草」は昭和2年ライオン歯磨本舗が「歯展」を東京、大阪、名古屋などで開いた時の資料をもととして編集され、昭和3年～6年までの3年間に計6冊が刊行された。本書は歯に関する古医書の考証から文献の出版や記録又、伝説、迷信から揚枝、歯磨、意匠、染黒歯など、歯学史上のみならず文学、風俗学、人類学など歯に関する極めて重要な文献資料の大集成である。

第1輯の凡例に「文献は最初原稿を作った時、多く手近なものから始めたので、孫引もあったが、校正の際はでき得る限り原本とつき合はして、努めて原文通りにした」とあり、又、第2輯の凡例に「本輯に於ても前輯通り、総て原形を尊重して置いた」又第3輯に「よはひ草は、あくまでも生のままの原料である。之を活かすも、むだにするのも、扱ふ人の腕次第、心次第である」又第4輯に「よはひ草第1輯を出してから年を亘っただけに、文献の如きは多く原本に就てつき合はすことができるやうになったが、それでも尚一二の孫引がある。これは今後とともなくすことはできないであろう」と記し、第5輯に「歯に関する文献資料は決して古今東西を網羅したといふではないが、普通の人の考へつく範囲のものは略取めたつもりである。これより以上の蒐集は寧ろそれを欲する人かぎりの仕事ではあるまいか」又「読者諸君は之に拠って、より有益なる、より有趣味なる論文なり随筆なりを贏ち得られたり、また之に拠って、種々なる発見思付を示されたり、それが篇者発行者の最初より最後まで熱望して已まない所である」と結んである。そこで、今回の復刊を機に、本書に集録されている文献を、日大松戸歯科大学資料館に蔵する原本と比較し、2、3の検討を加えてみたので報告する。

第1輯の内容の検討

21ページに「本朝奇跡談」から抜抄して次の如く記されている。

「陸奥国元船田村に弁慶が硯石有り。滝川と云ふ所名所なり、又享保二三年の此、南半田村百姓吉右衛門と云ふ者あり、彼れが畑に古塚ありけるを掘崩して見るに、大なり頭有り。差渡三尺四寸。下歯三十六枚、上歯四十五枚、歯の幅六分四方なりといふ。予此所へ行きしは享保十六辛亥の年なり。彼の歯を一枚見る、疑敷きことながら誠に鬼の歯ともいふべき歯なり。」と。

この元船田村とは現在、福島駅より東北本線を下りに乗車し4つ目の駅の藤田(国見町)のことで、そこに弁慶の硯石や滝川もあり、又南半田村とは藤田とひとつ前の桑折駅との中間に位し、今日桑折町に合併されている。筆者らは当地を訪れ硯石や滝川、又南半田をみることはできたが、この伝説について確かめることができなかった。

25ページに「願懸重宝記」について記載されているが、原書に比較し、○口中おさんのかた、榎坂のゑのき、○三途川の老婆、のみだしの記載はなく、その本文のみである。又、「おさんのかた」と「葵坂の榎」の原書にある両図の記載がない。

又、「口中おさんのかた」の本文中の最後の「良樹院瑠管大禅定尼、御縁日、八月八日、くわしくは其寺にいたりて縁記をたづぬべし」という極めて大切な文章が記載されていない。

又、三途川の老婆の本文の頭書は、原書には、同寺奥山の……である。ところを、同山……と寺を山に誤記されている。

その他別稿に詳述したように「日本橋の欄檻」などの記載が欠如している。(詳細は本誌の「願懸重宝記にみられぬ歯科の迷信、俗信」を参照のこと)

* Upon reading "Yohaigusa" -some thoughts on the content

** Mararu SUZUKI 日大松戸歯科大学

*** Toshihiko NIKUNI 日本大学歯学部

**** Mitsuo YATSU 日大松戸歯科大学

***** Kunio SUZUKI 日大松戸歯科大学

84ページに寺島良安著、「倭漢三才図会」のわが国最初の百科全書にみられる、歯科に関する用語の解説がなされている。

「和漢三才図会」は、「倭漢三才図会」ともいえ、80冊105巻よりなり、和漢にわたり天地人、三才の事物を網羅記述し、その初刊は正徳3年(1713)であるが、明治34～35年(1901～1902)に「倭漢三才図会」として復刻されている。原書は倭漢でなく和漢である。又「十二巻支体」の項に歯に関する記載があるが、それを巻十二と記されている。原書は12丁に口、13丁に歯牙、14丁に齶、齧、15丁に齶、舌の順に記載されているが、「よはひ草」には、歯牙(P84)、齶、齧(P85)、齶(P86)、口(P87)で、その記載順に違いがあるばかりでなく15丁の舌がない。

第2輯の内容の検討

22ページに「病の草紙」の中の歯科的記載の抜抄があるが、「おとこありけり、もとよりくちのは、みなゆるきて……」と「こしたといひて、したのねに……」の2疾患が摘録されている。しかし、この他に「宮こに女あり……いきのあまりにくさくて……」も口臭であるから、ここに抜抄されるべきであろう。

以下、病の草子について若干の解題を試みてみたいと思う。

病の草子について

「病の草子」は「奇疾艸子」(文化12年刊中川修亭著「本朝医家古籍考」)または「疾の草紙」(藤浪剛一、中外医事新報・127号、昭15. 1. 28)、「病の草紙」(杏林叢書、第1輯、大正11年11月)。「病の草子」(富士川 游著、医史叢談、昭17年)、あるいは「やまひの草子」(服部牧良、平安時代医学の研究、昭30年)、などと書かれているが、その発音は同じで、「やまひのそうし」であって、その名の示すごとく種々の病人相を画いて一巻軸とした絵巻物であって、「異疾草子」(杏林叢書)とも呼ばれている。筆者は土佐光長、詞書(説明)は寂蓮法師または兼好法師とも伝えられているが、明らかではない。光長は後鳥羽天皇によく仕えてその父は邦隆といい、土佐家の元祖の経隆の子である。即ち、光長は経隆の孫に当る三代目で

ある。土佐家は画家を以て累代その業としていたが、特に光長において最も傑出し、土佐の三筆(光長、光信、光起)と称して筆致の優れている点から数えあげられる時、そのうちの一人は必ず光長であるというほど、天才的な絵を画いたといわれている。歿年は不明である。光長にはこの「やまひの草子」の他に「餓鬼草子」と「地獄草子」とがあるが、この種の絵巻物は何れも同一系統のものと考えられ、平安朝時代の中期以後、盛んに行なわれた浄土宗の思想に基づいて画かれ、しかも「餓鬼道」や「地獄道」の苦悩に併せて、六道や三世因果の思想を背景として、人間の生死病死で苦悩する状況を多くの疾病をもとに、その病相を画いたものが、この「やまひの草子」であるといわれている。そしてこの「やまひの草子」は平安時代末期から鎌倉時代の初期にかかれたもので、12世紀の末頃に相当するものであって、絵巻物としては鎌倉時代に入れるべきものであるが、画かれている絵は明らかに平安時代の風俗とみられ、疾病の図録としては世界最古のものといわれている。この「やまひの草子」の原本は現在名古屋の関戸有彦家に所蔵されていて、「風病の男」、「小舌のある男」、「二形の男」、「眼病の男」、「歯のゆらぐ男」、「尻に穴の多い男」、「毛虱の男」、「霍乱の女」、「息の臭い女」、等さまざまな病気に悩んでいる人間の姿を9体描き集め、それぞれに詞書を付して1巻を成したものであるが、今日、絵具の損傷などから額仕立に改装されて国宝になっている。またこの他に残欠数図が諸家に分蔵され、計17図または18図あるいは図19ともいわれている。

今回の資料としたものは、日大松戸歯科大学に蔵する大和絵同好会で復刻した一巻軸で、中に奇疾の図18個にいちいち詞書が付けられてあって、芸術作品でもある。これら図の中には特に歯科に関係深いものとして、第4図の「こした」のある中年の男が口を開き、「こした」を他人にみせている図があるが、「こした」とは今の「がま腫」にあたるものであろう。また第8図の中年の男が食事を摂りながら、口を開いて痛む歯を女房にみせている図が画かれているのは、今の歯槽膿漏であろう。また第13図は中年の女が揚枝を手を持

ち、腕に水を盛って歯を磨き、これに仕える二人の女は袂で口を掩い、口臭を防いでいる図が画かれているが、これもまた「はくさ」即ち、高度の歯槽膿漏か、または慢性胃炎による醗酵性の口臭を指しているものの何れかであろう。などの三図がある。光長はこのように疾病に関する絵を画き得ても、もとより医師ではなかったが、その画かれている疾病の図は精細に観察され描写されている。しかもこれら絵を説明している詞書は、その時代の風俗はもとより疾病の状況、治療法などをうかがいしることができて、重要な医学史上の資料と考えられるものである。

以下「病の草子」の中の歯科に関する各図と、その詞書とにより若干の考証を試みてみたいと思う。

第4図（小舌又は重舌）

「こしたといひて、したのねに、ちみさきしたのようなるもの、かさなりておいづることあり、やまひおもくなりぬればはらにはうゑたりといへとも、のむと飲食をうけず、おもくなりぬれはしぬるものなり」と詞書に記されて、烏帽子姿の中年の男が半裸になり大きな口をあけ、右手を床に、左手は膝にのせて右足をのばしている。舌の下に小舌が描かれ、苦しみ嘆いている状で、父親らしき老人が、そのあいた口をやや上方より診察するように眺め、しかも「こした」を右指でさし、左手は息子の指を握りしめ（脈をみているのか）如何にも心配そうにみつめている。足元にいる円頂の男、白衣らしきものを着て燈明の灯で患者の足に灸をすえている。やはり心配顔である。左手は指に密着したもぐさを爪はじきしている如く、また右手にははしのようなものをもって、それを眺めているが、このはしであるいはこの「こした」をつまもうとしているのであろうか、燈明の灯は如何にも風のない室内をあらわしているが、灸のあつさのためか足の指先が屈して力み、煙は自然に風無き室内ながら揺れ動いている。なお「こした」とは「和名抄」に「重舌俗古之太、舌本血脈脹然変生如舌之状」とあって、舌背の血管が腫脹して、小舌のごとくなるために名付けられたもので、今日のガマ腫と考えるとよいであらう。

う。所謂二重舌の症状である。

第八図（歯槽膿漏症、歯動欲脱）

「おとこありけり、もとよりくちのは、みなゆるきて、すこしも、こわきものならば、かみわるにおよはす、なましひに、おちぬくることはなくて、ものくふ時にさわりてたえかたりけり」と詞書に記されていて、中年の男が食事を取りながら、口を開いて痛む歯を女房にみせていて、しかもこのみている女房の顔は心配そうである。また盛られたご飯は大盛りで、汁と野菜の煮物らしいものが三品、しかも膳がないところから、恐らく当時の下級庶民生活のひとつまの描写であることが明らかである。この歯の病は歯槽膿漏症（歯漏・歯草）で、その中どの歯か急性炎症を起こしたところだろう。なお山田平太氏によると、「中国書には「歯漏」といって、その成因について「病源候論」に

手の陽明の支脈は歯に入る。風邪経脈に客とし歯根に流滞して齦を腫し濃汁を出さしめ、愈て更に発る。これを歯漏という。

と記しているので、古代に認めた病とするが、鎌倉時代に珍しい病として草紙に収められたのであろう。

わが国の口中書は歯草（はぐさ）といい、その症状は齦が腫れてうるみ色に臭く歯と齦が落ちる、と記されている。療法は含み薬、吹き薬、付け薬と、うみけあるか、色黒いは針を立て薬をつける、と解説されている。

第十三図（口臭の女）

「宮こに女あり、みめ、かたち、かみすかたあるいかしかりければ、人さこしにつかひけり、よそに見るおとこところをつくしけれとも、いきのかあまりにくさくてちかつきよりぬれば、はなをふさきてにけぬ。たたうちみたるにも、かたはらによる人くささたえかたかりけり」と詞書にあり、中年の高貴な美女が揚枝を手を持ち、腕に水を盛って歯を磨き、これに仕える二人の女性は袂で口を掩い、口臭を防いでいる図がかかっている。しかもあまりにも強い口臭のために、恋する男ににげられた一文はなかなかおもしろい。「はくさ」即ち高度の歯槽膿漏症と考えられるし、或

は慢性胃炎による醗酵性の口臭を指したものであろうか、いずれにせよ口臭の甚しきは仏の罰によるなどの俗説もあったので、これを異(奇)疾の中へ入れたものであろう。なお、このものは「よはひ草」に記載されていない。

大和絵同好会の「病の草子」には、「侏儒」、「白子」、「半陰陽」など、十八種の奇疾を詞書により説明が加えられている。これら絵は今日の医学よりみれば、それ程珍しい疾病ではないが、当時としては真に珍しい奇病と考えられていたものであろう。特にこれら十八種のなかに、歯科に関するものが三種あげられているのは、大いに興味深いものがある。

なお、右異疾図一卷土佐氏所画蓋数百年前之物画院板谷慶意蔵之予倩姫路画史仲野永舟模写之以蔵千家云

寛政十二年庚申夏四月念八日 丹波元簡識 千聿修堂 とあるので寛政12年に多紀元簡(桂山)が板谷氏の所蔵のものを借りて、仲野永舟に模写させたものが、今日の関戸家蔵国宝のものと思われる。

新撰病草紙について

新撰病草紙一卷は徳川幕府医学館の助教、大膳亮道敷が、嘉永3年(1850)、医学館で経験した。異疾の症例を輯め録したるもので主に外科的疾患16種を選んで土佐光長の「病の草紙」に倣ひ、浪華の画工、福崎一宝をして病者を画かしめ、これに稲垣正信により簡単な詞書を附したもので、この中に、一、「痰包の女」(重舌、ガマ腫)、十二、「疳」(口唇腫脹の女)、の二図が口腔に関するものである。その原本は故富士川 游氏が所蔵(昭和15年頃)していたが、今日、京大富士川本にもみあた

らない。ただ、この富士川氏のものを、杏林叢書第1輯に転載されている。このものも全く「よはひ草」に記載されていない。

第3輯の内容の検討

72~73ページに鷹取甚右衛門尉撰、「外療細塹」、卷上の抜抄の記載をみるが、原書は、九、齒、十、舌、十一、唇、となっているが、「よはひ草」には齒のみで、10の舌と11の唇の項が欠如している。又、卷下の十二、齒草、十三、の口内痛、十五、の唇の全文も記載もれである。

なお、鷹取流外科といえば、「外科新明集」(上・中・下)よりの抜抄も当然必要となってくるが、これらは全く記載されていない。即ち、二十七、口中、二十八、舌、二十九、齒、三十、唇、四十三、欠唇、四十八、齧齒などである。

なお、第4、第5輯については次回に述べたいと思う。

文 献

- 1) 杏林叢書、第1輯：病の草紙、及び、新撰病の草紙、吐鳳堂、東京、大正11年。
- 2) 富士川 游：科学随筆、医史叢談、書物展望社、昭17和。
- 3) 服部敏良：平安時代医学の研究、桑名文星堂、京都、昭30年。
- 4) 藤浪剛一：絵巻物所載の病に関する医史学的考察、中外医事新報、1275：1~19、昭15年。
- 5) 今田見信編・山田平太解説：歯学史料(46)、(47)、(48)、医歯薬、東京、昭和42年。
- 6) よはひ草、第1~3輯、小林商店、昭3~4年。
- 7) 鷹取甚右衛門：外科新明集、天正9年(1581)。
- 8) 鷹取甚右衛門：外療細塹、慶長15年(1610)。
- 9) 大和絵同好会：病の草子、大正9年。